

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

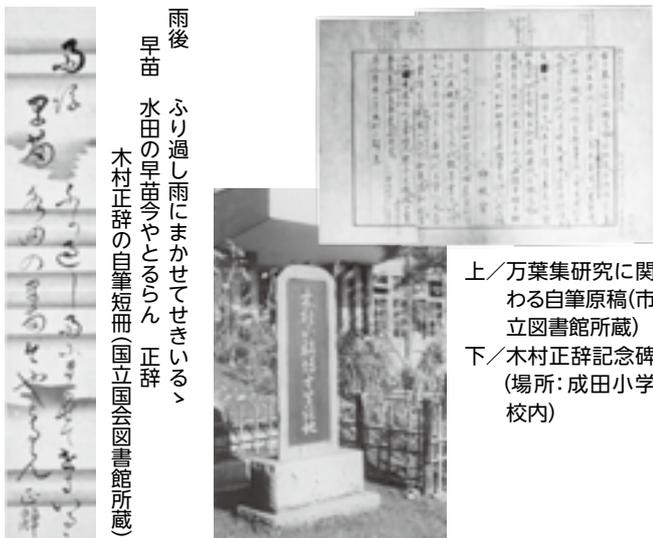
## 第8回 きむらまさこと 木村正辞

### 木村正辞という人

木村正辞は、文政10(1827)年4月6日、埴生郡成田村(現在の仲町)に父清宮仁助と母ちゑの長男として生まれた。生家は成田山新勝寺の法衣を作る仕立業を営んでいた。正辞は和歌に堪能な母の教えを受け、読書に親しみ和歌を詠むなど、文学少年として育った。

やがて、成田村字辻堂(現在の成田高校付属小学校敷地)にあった「橘川塾」で、漢字、和歌、筆道、算術を学ぶようになった。この塾に15歳まで通ったが、10歳を過ぎた頃には、『唐詩選』『百人一首』を会得したといわれている。この頃、和歌に関心を持ち、歌人の神山魚貫(広報なりた11月15日号掲載)を訪ね、和歌の教えを受けた。

こうした正辞を見ていた両親は、そんなに本が好きならば本屋を出して好きな道で独立させてやろうと成田山の堂庭に店を出してやった。ところが正辞は、客が来ても自分の好きな本ばかり読んでいて、とても商売に身を入れる気配はなかったとい



雨後  
早苗  
ふり過し雨にまかせてせきいる  
水田の早苗やとるらん 正辞  
木村正辞の自筆短冊 国立国会図書館所蔵

上/万葉集研究に関する自筆原稿(市立図書館所蔵)  
下/木村正辞記念碑(場所:成田小学校内)

文政10年~大正2年(1827~1913)

埴生郡成田村(現在の仲町)に生まれる。国学者、国文学者。号は懞齋。文部省や司法省などの諸官、文科大学教授などを歴任。生涯を万葉集の研究に打ち込んだ。代表作に『万葉集美夫君志』『万葉集書目提要』などがある。



う。

天保14(1843)年、正辞が16歳の時、木村孝之助の養子となり上京した。木村家は京都妙法院一品親王家臣で、正辞は「埴磨」という字名を継いだ。

### 万葉集の研究に打ち込む

上京後の正辞は、佐原出身の国学者伊能穎則の門下に入り、和歌や国学、儒教者の寺門静軒に漢字、国学者の岡本保孝に和漢学と音韻学を学んだ。若くして学界で注目を浴びようになり、特に万葉集の研究では重視された。

文久3(1863)年に幕府の和学講談所会頭助役となり、慶応3(1867)年には、水戸藩駒込文庫に出仕した。維新後は、文部省、神祇官、宮内省の諸官となり、東京帝国大学の教授などを歴任し、帝国学士院会員に推された。明治26(1893)年、一切の官職を辞すと、以後は万葉集の研究に努めた。同34年、75歳で文学博士を授与された。こうした学者としての生涯を通じて、多くの著書を記した。大半は万葉集に関するものであり、「万葉集博士」といわれるようになった。

生涯を万葉集の研究に打ち込んだ正辞は、大正2(1913)年4月14日、東京市下谷区(現在の台東区)で86歳の生涯を閉じた。成田小学校にある記念碑は、正辞の門下生であった佐佐木信綱の提唱により、昭和25(1950)年に建てられたものである。

### 編集後記

表紙の陸上クリニックを取材した際、見学していた陸上部顧問の先生が、次のように感想を述べていました。「陸上王国といわれるアメリカも特別なことをしているわけではない。やはり基本が大事なんだ」。今号が発行されるころには冬季オリンピックが開催中です。選手は基礎から地道に重ねてきた練習の成果を、この一瞬に出し尽くそうと奮闘するでしょう。私はその輝く姿を目に焼き付け、こつこつと頑張る力をもらおうと思います。

平成30年2月15日号 No.1357

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。